

I) はじめに

伊谷樹一先生の「生業生態論Ⅱ」の講義を受けて一番、興味をひかれた事は食物の平均化(以後、平準化機構という)である。

妬みが一番の邪術を産み、邪術が一番怖いものとされている村社会の中で、人の妬み・恨みを買わないように、「世帯を超えて共食する」という平準化機構が村の生活様式として行われてきた。その結果、村全体が平等に貧しく、村内部の変化が抑制されてきたのだ。

しかし一方でこの平準化機構は、法律も、土地の所有の規範もない中であって、無秩序な熱帯雨林の切り開き、市場主義的な農村開発の拡大を抑えてもきたという事を学んだ。

またこの平準化機構は、1980年代半ばのアフリカにおける各国政府の農業政策の転換に伴って、一部の先駆者あるいは「変わり者」が始めた新しい農法などのイノベーションを急速に村内に広め、促進するようにも働く特性がある事を今講義において知った。¹

けれどもそうした特性をもった平準化機構によってもたらされた新しい農法は、一方で労働力と資金のある世帯と余力のない世帯との間に経済的格差をもたらし、農業の拡大における土地の問題やアフリカの人口の増加も相まって、現在深刻な環境破壊・エネルギー問題をもたらししている状況である。

しかし、筆者はこの平準化機構が環境破壊・エネルギー問題を引き起こした起因とは考えてはいない。上述したように平準化機構は「法律も、土地の所有の規範もない中であって、無秩序な熱帯雨林の切り開き、市場主義的な農村開発の拡大を抑えてもきた」のであり、この環境問題・エネルギー問題の起因は別のところに存在すると思われる。

特にここで考えなければならないのは市場主義的²な農村開発ではないだろうか。

この市場主義的な農村開発が拡大した背景には、社会主義政策の破たん、1986年の世界銀行やIMFによる構造調整計画の勧告に伴う経済の自由化、市場経済化、そして冷戦の終焉によってもたらされた政治・経済のグローバル化がある。³

これらの社会情勢の中でアフリカ諸国は西欧的な制度改革(農業・土地)に舵を切ったわけだが、これらの制度改革はアフリカ独自がもたらした文化を考慮していない。

その結果、現在の環境問題・エネルギー問題へと発展しているのではないだろうか。

なるほど、つまりこの現代であってその制度改革はアフリカにおいて、行き詰まりを起こしつつあり、西欧的発想だけでは解決できない問題が多々でてきているのである。

さて、ここで筆者はここで上記の問題をキリスト教の観点から論じてみたい。

ひとつは上述した西欧的な制度改革の基盤にあるのは資本主義経済であり、その資本主義経済はキリスト教特にプロテスタントティズムからの影響を大きく受けているというマックスウェーバーの論考を起点に社会学者のラインホルト・ニーバー、心理学者エーリッヒフロムより論じつつ、「なぜ西欧的な制度改革はアフリカの文化を考慮できなかったのか」と

¹ 掛谷誠・伊谷樹一 [編著]、『アフリカ地域研究と農村開発』、京都大学学術出版会(2011年2月)、7項。

² ここでいう市場主義の定義は、「経済を市場のなすがままに任せておくことが経済政策の基本とする考え」「利益を生み出す事のみを目的とする考え」とする。

³ 掛谷誠・伊谷樹一 [編著]、同上、467項。

いう問題を考えたい。

もうひとつは、冒頭でも紹介した平準化であるが、元々の成り立ちは違ったとしてもその生活様式はキリスト教的な原始共産主義的生活様式に通じるものがある。

しかし、この平準化とキリスト教の様式が似ているにも拘らず、実際のアフリカでの農村開発においてはキリスト教・特に教会が農村にもたらしたキリスト教倫理観・世界観からの行動は、平準化機構とは対をなし、結果的に市場主義的な農村開発や環境問題に繋がるような問題を引き起こしてしまっているように思われる。⁴

そのようになってしまった原因はどこにあるのか。

そしてこれからのキリスト教・教会に求められることはなんであるのかをドイツの神学者：ディートリヒ・ボンヘッファーより論じつつ、ここでは解決を見る事ができないにしても今後の学びの指針のひとつになればと考える。

II-1) 禁欲主義と資本主義

マックスウェーバーによれば、資本主義の精神はプロテスタントティズム・特にカルヴァニズム的禁欲主義から来ているという。中世の禁欲主義はこの世から離れて修道院などで取り入れ行われてきたが、宗教改革以後は今与えられている職業・労働は天賦であるという観点より、神に喜ばれる行為（労働）⁵を行いつつ道徳的に生活することが求められたために世俗の中で禁欲が行われるようになった。

そのような道徳的な規範、特に節制が求められた中で労働に勤勉に勤しむため、彼らの財産は当然増えていき富裕になる。そしてこれは神の召命（コーリング）であると神学にお墨付きが与えられたのである。⁶ しかし当然のことながら財が増えれば現世の欲望や生活の見栄えも増加するようになり、その精神は段々と消えていったのである。

この理由としてフロムは、プロテスタントティズムは人間の魂を解放しようとして【個人の自由】⁷を与えたからだとする。なるほど、それまで王政に代表されるように伝統のうえに築かれた社会組織、伝統の制限をこえて個人が発展する余地の比較的少ないような固定した社会組織に対して、個人はもはや束縛される事なく、自由が与えられたのである。⁸

しかし、その自由が故に、神が父にそして教会は「母なる教会」と言われ、母親に例えられたように、教会を通して与えられていた神との関係が、この自由によって、神と個人との関係へと変わっていった。それまで集団だったものが突如として、個人ただひとりで神に向き合わなければならないため、人はその圧倒感に襲われ、完全な服従によって救済を求めざるを得なくなった結果、個人は完全に孤独となってしまったのである。⁹

⁴ 掛谷誠・伊谷樹一 [編著]、上掲、132-146 項。

⁵ 貧しいことを願うのは、病気になることを願うのと同じであり、労働能力のある者が乞食をするのは、怠惰として罪悪であるばかり、使徒の語に照らしても、隣人愛に反する事だった。マックスウェーバー[大塚久雄訳]、『プロテスタントティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫（2004年6月：36版）、311 項。

⁶ しかし、この富裕になった事によって現世が与える楽しみの享樂に対しては、禁欲は全力で反対していたし、庶民の踊り場や酒場も禁欲の敵とされていたのである。

⁷ ここで言及されている自由には、言論の自由、政治的自由なども含まれる。

⁸ エーリッヒ・フロム[日高六郎訳]、『自由からの逃走』、東京創元社（1994年7月：103版）、123 項。

⁹ エーリッヒ・フロム[日高六郎訳]、同上、125 項。

そのような孤独感に襲われた人間は、「経済的活動や成功や物質的獲得が、それ自体目的」とする資本主義に取り込まれ、人はそれに知らずと身を投じていき、人間はいつの間にか巨大な経済的機械の歯車になってしまったのである。

またニーバーによれば、近代文明（資本主義も含めて）は際限なき社会的楽観主義の波に乗せられていく中で近代的セキュラリズムの学派が生まれたが、これらのすべての学派がキリスト教の原罪論を拒否したからだとする。¹⁰ なるほど自己愛に溺れた墮落などを防ぐ防波堤となるキリスト教原罪論がこの近代的セキュラリズムによって取り除かれてしまったために道徳的に歯止めの役割をなすものが何もなくなってしまったのである。

また 18・19 世紀に発達した功利主義は、「私益と公益は一致する」とした。

ニーバーは、確かにそれは究極においては真理であるが、現状は決して絶対的な真理ではないとする。しかしこの功利主義に信頼を置くデモクラシーはこの「私益と公益は一致する」という考えを発達させ結果、自由放任主義の哲学が政治の世界でも大きく支持されるようになり人間の食欲を加速・拍車をかけたのである。^{11 12}

II-2) 資本主義経済とキリスト教

さて冒頭で述べたように「なぜ西欧的な制度改革はアフリカの文化を考慮できなかったのか」という問題をこれまで考えてきたわけだが、上記より資本主義経済自体は西欧的な基盤をもっているが完全にキリスト教的倫理は欠落してしまったことがよくわかった。

また、プロテスタントティズムから派生した「自由」と「財」は、目に見えるものが見る見る変わっていく近代文明にあって、人間の内に現世の欲望や生活の見栄えを引き起こし、本来ならば相反されるはずの「自己の利益を追求する『自由』と『財』」へと、変貌してしまった事を浮き彫りにした。

これらを基盤とした資本主義経済はのちに市場原理主義的資本経済を生み出す。

これに対してキリスト教は一体何をなしてきたのだろうか。

確かにキリスト教倫理が個人的なものとなってしまう側面は否めない。

その意味でもアフリカに多大な影響を与えている現在のキリスト教が、現在のアフリカの市場主義的な農村開発の拡大を防ぐことなく許してしまっているキリスト教・教会の責任は決して軽くはないと思われる。

今講義において、「現在のアフリカの環境問題は待ったなし」と学んだ者として、キリスト教は個人的な罪理解だけではなく、社会的な罪の側面を持ち、キリスト教の起こした過去と過ちと向き合いそして反省の中で、どうアフリカの人々と共に共感し合い、共に未来を築いていくのか考えていかななくてはならない。これは世界の教会が今問われている事ではないだろうか。

¹⁰ ラインホルト・ニーバー[武田清子訳]、『光の子と闇の子』、新教出版社（1951年5月）、36項。

¹¹ ここで注意すべきはアダム・スミスが唱えた利己主義は「公益のために仕える賢明な利己主義者」である。そしてそれは神の摂理による自然法によって自己を抑制するとした。

¹² ラインホルト・ニーバー[武田清子訳]、同上、52項。

Ⅲ－１）「平準化機構」と「キリスト教原始共産主義的生活様式」の共通点と相違点
さて、今講義においてアフリカ農村社会における平準化機構の特性を学んだ。

すでに記述した通り、この平準化機構とキリスト教原始共産主義的生活様式¹³（以下：キリスト教の生活様式）は通じるものがある。

その共通点は、食物を分けてもらう、自分が利益を得た時に集落の人々に分け合うという相互扶助である。¹⁴

それとは逆に相違点としては、平準化機構の背後にあるものは祖霊や精霊、それに「妬み」や「恨み」に起因する呪いへの恐れ¹⁵であるが、一方のキリスト教の生活様式は、神への感謝と貧しき者への供給の義務である。¹⁶

このように「分け合う」という意味においては通じ合う両者であるが、出発点の違いによって対立がもたらされる事もある。

平準化機構の出発点は「祖霊」・「精霊」信仰でありこの対象の多くは自然物・自然現象である。一方のキリスト教の生活様式は、いかに神に喜ばれる生活・節制を心がけ、弱き者に寄り添う生活をするかが問われており、この対象は人間・人間の意識と行動である。

ただ双方、信仰を通して行動する原動力となっている「恐れ」は、共通しているように思われる。¹⁷

そのため、「恐れ」を背景に行動する者たちの言動はまさに真剣であるだろう。

そしてそれぞれの信仰の対象物が「もの」と「人」という大きな違いがあるが故に、対立も引き起こされてしまうのではないだろうか。

Ⅲ－２）これからの農村開発で考えるべき事柄

アフリカ研究の報告の中で対立の具体例として、祖霊信仰から湿地を守ろうとする村評議会と、土地不足に苦しむ若者や移住者と寄り添い助け合おうとする牧師の姿が記されていた。¹⁸

これはまさに信仰の対象物の違いによるどころも大きいと思われる。

これをマクロ的な視点で言い換えれば、湿地を守る＝環境保護、弱者への寄り添い＝人権擁護という事もできるのではないだろうか。

そのように考えた際、今講義で学んだことは環境保護＞人権擁護ではなく、また人権擁護＞

¹³ 現代のキリスト教徒がキリスト教初代教会のように厳密にこれを守っているとは考えられないが、少なからず「奉仕の精神」として認識しているキリスト教徒は多いと思われる。

¹⁴ 新約聖書：使徒言行録 4 章 32 節「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものと言う者はなく、全てを共有していた。」

¹⁵ 掛谷誠・伊谷樹一 [編著]、上掲、7 項。

¹⁶ 新約聖書：使徒言行録 4 章 34－35 節「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。」

¹⁷ 新約聖書：使徒言行録 5 章 1～11 節には持ち物を共有することをごまかしたアナニアとサフィラが息絶えた記事が記されている。その光景を見た教会の人々が恐れを抱く。

¹⁸ 掛谷誠・伊谷樹一 [編著]、上掲、143 項。

環境保護でもなく、環境問題と人権擁護とは共に連動しているという事である。

キリスト教世界の中には、人権擁護>環境保護という考えをもつ人たちも多いように思われる。その意味で「環境問題と人権擁護とは共に連動している」という事柄は、上記のような考えを持つ人々に対して、考えに変化をもたらす一石となるであろう。

ボンヘッファーが自身の著書で懸念しているようにキリスト教世界においては自分の宗教の「優位性」を強調する事が少なからずある。¹⁹ しかしこれは交わりを破壊する事であるとボンヘッファーは語っている。

そしてキリスト者に必要なものは、神に対して自分が罪びとであるという告白であり、それは交わりへの通路を開くものであるという。²⁰

なるほど、この罪びとであるという告白を通して、他者への戦闘態勢は解除され結果、優位性というものは打ち碎かれるのである。

IV) まとめ

さて以上のように、「なぜ西欧的な制度改革はアフリカの文化を考慮できなかったのか」という問題と、「平準化とキリスト教の様式の共通点と相違点」、「これからの農村開発で考えるべき事柄」を論じてきた。

これらの事から見えてきた共通項は、キリスト教会の「自身の罪意識」の再認識であろう。キリスト教会はこれまでこの「自身の罪意識」を個人の信仰にのみあてはめてきた。

しかし、多様化する社会の中であって、また特にアフリカの農村社会の中であって個人のみならず社会の中で考えて行く必要があると思われる。

罪意識から行われる罪の告白は自分の身を低くするものであり、かつ自分にとって触れたくないのを傷つける行為なのである。

けれども、であるがゆえに、イエス・キリストの十字架における罪の贖いを深く理解することが許され、「こんな自分が赦されたのだ」というところから出発するからこそ他者の存在を認める事ができるのであり、さらに他者の言葉に耳を傾けて聴く事ができるのである。

そしてイエス・キリストの復活の希望を信じられるからこそ、その希望は困難な問題に立ち向かう勇気とチャレンジになるのである。

現在、アフリカの環境問題・人権問題は待ったなしの問題でありこれらは連動している。

その中でキリスト教会は、自分の宗教の「優位性」を強調することをやめ、自分とは違う他者に対してイエス・キリストがそうであったように、へりくだって根気強く他者と対話していく事が求められており、これが結局的にアフリカの農村の環境問題・人権問題に対して教会・キリスト教徒が同問題の解決の道に寄与できるひとつの方法ではないかと考える。

¹⁹ ディートリヒ・ボンヘッファー[森野善右衛門訳]、『共に生きる生活』、新教出版社

(1976年8月)、86項。「他人と出会う最初の瞬間から、人間は、他人に対して戦闘態勢を取ろうとし、またそのような姿勢を最後まで崩そうとはしないからである。」

²⁰ ディートリヒ・ボンヘッファー[森野善右衛門訳]、同上、112項。